

愛媛県の高校における家庭科の授業と教諭の意識

長野 隆男 ・ 平岡 知子

(愛媛大学教育学部)

香川 実恵子

(愛媛県立小松高校)

Study on classes in home economics and its teachers' consciousness at high school in Ehime prefecture

Takao NAGANO, Tomoko HIRAOKA and Mieko KAGAWA

I. はじめに

平成11年3月に高校の学習指導要領が改訂され、新教育課程（以下、新課程）が、平成15年4月から年次進行で実施されている。改訂は、「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開して、生徒に「生きる力」を育成することが基本的なねらいであり、考えや能力が多様化する生徒に対して、個性の伸長を重視した選択の幅を広げる必要性を挙げている¹⁾。

家庭科の旧教育課程（以下、旧課程）では、3つの基礎科目（「家庭一般」「生活一般」「生活技術」）から1科目を標準で4単位履修していたが²⁾、今回改定された新教育課程（以下、新課程）では、「家庭総合」「生活技術」及び「家庭基礎」の3科目から1科目を履修することになった。そのうちの「家庭基礎」は標準履修単位が2単位である¹⁾。すなわち、高校家庭科の履修単位は、旧課程では4単位であったが、新課程では選択の幅を広げるとの理由から2単位のみ履修も可能となった。そのため、各高校における履修単位が多様化するとともに、授業内容も変化することが予想される。

さらに、家庭科は総合的実践科学といわれるように、家庭科教諭は衣食住、保育、家族などの広範囲にわたる内容を総合的な視点で捉える必要がある³⁻⁵⁾。そのため、大学側の支援の必要性も高い教科と考えられる。一方、国立大学は平成16年4月から法人化され、地域連携を中心とした社会貢献が強く求められる状況にある。

このように、高校家庭科とその教諭を養成する国立大学のシステムが大きく変る中で、高校家庭科の現状と課

題を把握する必要性は高い。そこで、まず、旧課程から新課程への変化を調べるために、履修単位数と授業内容について調査した。次に、高校家庭科教諭が、家庭科の各指導内容に対して、生徒への指導をどの程度必要と考えるか（指導の必要性）、教諭自身はどの程度得意としているか（得意の程度）、教諭自身は大学でどの程度学んだか（大学で学んだ程度）、教諭自身はどの程度学ぶことが必要と考えるか（学ぶ必要性）の4点について意識調査をおこなった。これらの調査により、教科指導上の現状と課題の把握を目指し、高校家庭科とその教諭を養成する大学のあり方について考察を試みた。

II. 調査方法

1. 調査時期及び調査対象

愛媛県の高校（私立高校は除く）とその家庭科教諭を対象として、平成15年7月から10月にアンケート調査と電話による聞き取り調査を行った。履修単位数は、愛媛県の公立高校すべてを対象として、アンケートと電話による調査を行った。各分野に費やす授業時間数は、回収できたアンケートに基づいた。アンケートの回収数は37校分（全61校）、回収率は60.7%であった。意識調査は、家庭科教諭を対象にアンケート調査を行った。回収数は、106（全教諭151名）、回収率は70.2%であった。教諭の人数は、平成15年度愛媛県教育関係職員録を基にした⁶⁾。

2. アンケートの構成

履修単位数は、家庭科基礎科目の単位数を調査した。

各分野に費やす授業時間数については、分野を家庭生活、高齢者、保育、衣、食、住、消費・経済の7つに分け、新課程と旧課程における各高校の平成15年度の年間指導計画を基に調べた。

教員の意識調査に用いたアンケートを資料として示す(p 141)。意識調査は、家庭科基礎科目「家庭総合」の学習指導要領を基に、表1に示す5つの指導項目と17の指導事項に分け、それぞれの指導事項について評価して

表1. 家庭科の指導項目と指導事項

指導項目	指導事項
人の一生と家族・家庭	人の一生と発達課題 家族・家庭と社会 生活設計
子どもの発達と保育・福祉	子どもの発達 親の役割と保育 子どもの福祉
高齢者の生活と福祉	高齢者の心身の特徴と生活 高齢者の福祉 高齢者の介護の基礎
生活の科学と文化	食生活の科学と文化 衣生活の科学と文化 住生活の科学と文化 生活文化の伝承と創造
消費生活と資源・環境	消費行動と意思決定 家庭の経済生活 消費者の権利と責任 消費行動と資源・環境

もらった。評価の質問事項は4項目であり、指導の必要性、得意の程度、大学で学んだ程度、学ぶ必要性についてとした。評価は、4段階で評価してもらい、指導の必要性は、「大変必要である」「かなり必要である」「必要である」「必要性は低い」、得意の程度は、「大变得意である」「得意である」「あまり得意でない」「得意でない」、大学で学んだ程度は、「詳しく学んだ」「ある程度学んだ」「あまり学ばなかった」「学ばなかった」、学ぶ必要性は、「大変必要である」「かなり必要である」「必要である」「必要性は低い」の一つを選択してもらった。4段階の評価にそれぞれ4, 3, 2, 1と点数化し、総点を算出して、その平均値から17の指導項目について順位付けを行った。また、統計処理はexcelを用いておこなった⁷⁾。

Ⅲ. 結果と考察

1. 新課程と旧課程での家庭科基礎科目の履修状況

平成15年度は、2年生が旧課程で、1年生が新課程で

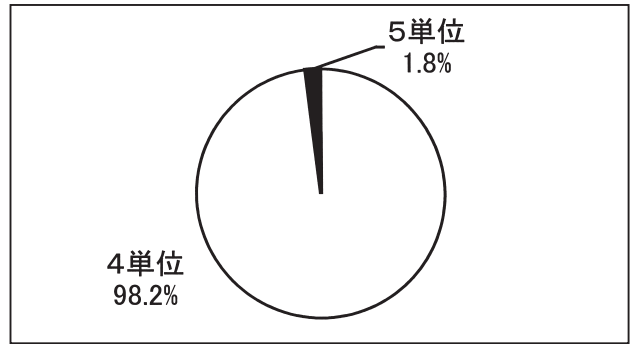


図1. 旧課程における単位別生徒数の割合

学んだ。旧課程と新課程で学ぶ生徒が履修している単位数を生徒数の割合で表した結果を、それぞれ図1と図2に示す。旧課程ではすべての生徒が4単位以上で履修しているのに対し、新課程では46%が2単位、17%が3単位、37%が4単位で履修と、2単位で履修している生徒が一番多い結果であった。履修単位数の平均値は、旧課程が4.0、新課程が2.9であり、新課程となり実際の平均履修単位数が1単位以上減少していた。

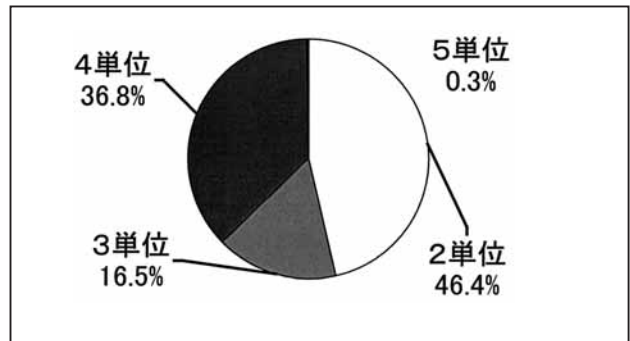


図2. 新課程における単位別生徒数の割合

履修単位数の調査結果から、旧課程では4単位、新課程では2単位で履修している生徒が多いことがわかった。さらに、旧課程の4単位履修と新課程の2単位履修における授業時間数を、7分野にわけて調べた。その結果を図3に示す。旧課程の4単位履修では、「食」「衣」「保育」の分野が他の分野よりも授業時間数が多く、「食」の分野が37.8時間、「衣」の分野が25.2時間、「保育」の分野が20.3時間で、他の分野は10時間前後であった。一方、旧課程の2単位履修では、「食」の分野が16.7時間、衣の分野が8.6時間、「保育」の分野が7.8時間と大幅に減少し、他の分野ではそれほど変わらない授業時間数であった。

以上の結果から、新課程では2単位履修が多くなり、

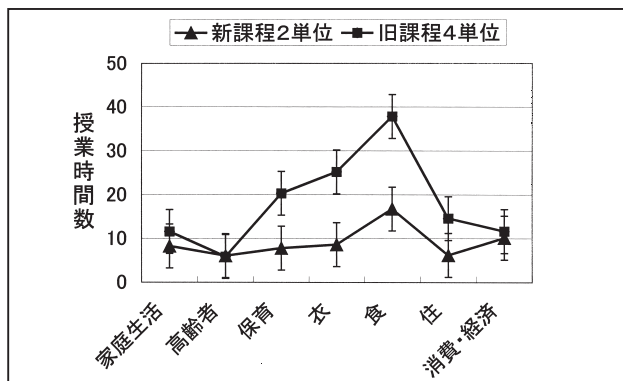


図3. 新課程と旧課程での各分野における授業時間数 (エラーバーは標準偏差)

割り当て授業時間数は、「食」「衣」「保育」の分野が大幅に削られ、食以外の分野はほぼ同程度になっていることがわかった。

2. 家庭科教諭の意識

高校家庭科の教諭が家庭科の授業における17の指導項目(表1)対して、生徒への指導をどの程度必要と考えるか(指導の必要性)、教諭自身はどの程度得意としているか(得意の程度)、教諭自身は大学でどの程度学んだか(大学で学んだ程度)、教諭自身はどの程度学ぶことが必要と考えるか(学ぶ必要性)の4点について意識調査をおこなった。

(1) 指導の必要性

指導の必要性に関して「大変必要である」「かなり必要である」「必要である」「必要性は低い」と回答した教諭の割合を図4に示した。次に、教諭が指導の必要性を

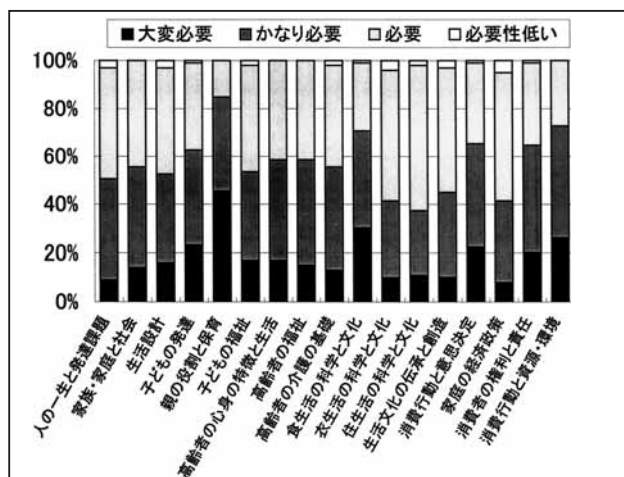


図4. 指導の必要性

表2. 指導の必要性 (上位5指導項目)

順位	指導事項	平均値
1	親の役割と保育	3.30
2	食生活の科学と文化	3.00
3	消費行動と資源・環境	2.99
4	消費行動と意思決定	2.87
5	子どもの発達	2.85

感じている指導事項の上位5事項を表2に示した。指導の必要性を感じている程度が大きい分野は「保育」「食」「消費・経済」の分野であった。保育分野では「親の役割と保育」が、最も指導の必要性が高いと考える指導事項であった。保育分野は、小学校では家族の一員としての自覚を育てる学習、中学校では幼児を理解しその世話ができるようにする学習、高校では親となって子どもを育てる学習を目標として指導することが結果に反映していると考えられる⁴⁾。また、「食」や「消費・経済」など、実生活へ直結することを指導の必要性が高いと考えている傾向であった。

(2) 得意の程度

得意の程度に関して「大変得意である」「得意である」「あまり得意でない」「得意でない」と回答した教諭の割合を図5に示した。得意であると感じている指導事項の

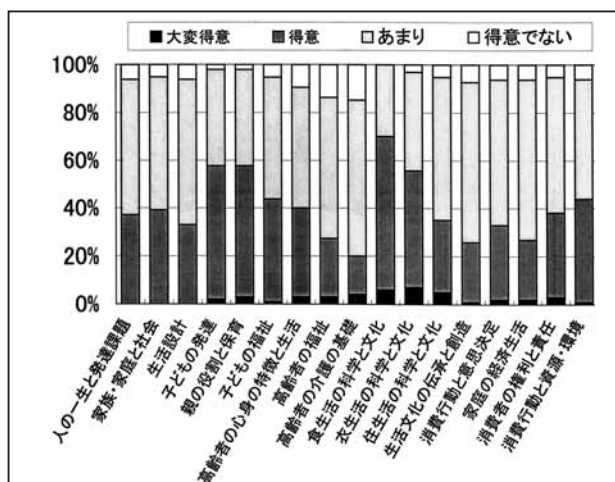


図5. 得意の程度

上位5事項を表3に、下位5事項を表4に示した。得意意識が高い分野は「食」「衣」「保育」の分野で、逆に得意意識が低い分野は「高齢者」「消費・経済」「家庭生活」であった。「衣食住」の中でも「食」と「衣」の分野に、

表3. 得意の程度（上位5指導項目）

順位	指導事項	平均値
1	食生活の科学と文化	2.76
2	衣生活の科学と文化	2.60
3	親の役割と保育	2.59
4	子どもの発達	2.58
5	子どもの福祉	2.40

表4. 得意の程度（下位5指導項目）

順位	指導事項	平均値
13	生活設計	2.27
14	家庭の経済生活	2.23
15	生活文化の伝承と創造	2.20
16	高齢者の福祉	2.17
17	高齢者の介護の基礎	2.10

得意意識が高く、また、「保育」の分野も高いと考えていた。逆に、得意意識が低い指導事項に「高齢者」分野に関する事項が多い結果であった。「高齢者」分野を苦手と感じている教諭が多いと推察されることから、「高齢者」に関する情報や教材提供による支援が求められていると考えられる。

(3) 大学で学んだ程度

大学で学んだ程度に関して「詳しく学んだ」「ある程度学んだ」「あまり学ばなかった」「学ばなかった」と回答した教諭の割合を図6に示した。また、大学でよく学んだと考えている指導事項の上位5事項を表5に、下位5事項を表6に示した。大学でよく学んだと考えている分野は「衣」「食」「住」「保育」で、逆に学んでいない

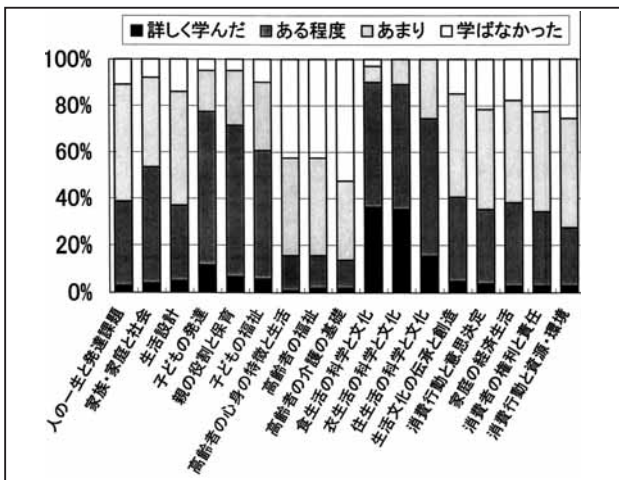


図6. 大学で学んだ程度

と考えているのは「高齢者」と「消費・経済」の分野であった。上位3事項を「衣食住」が占めていた。逆に、「高齢者」と「消費・経済」の分野は、学んだ程度が低いことが分かった。これらの結果は、家庭科教員免許の取得に必要な科目とよく対応していると考えられる。高校の現状を考慮すると、「高齢化」と「消費・経済」に関する科目を、大学のカリキュラムに充実させる必要があると思われる。

表5. 大学で学んだ程度（上位5指導項目）

順位	指導事項	平均値
1	衣生活の科学と文化	3.25
2	食生活の科学と文化	3.24
3	住生活の科学と文化	2.90
4	子どもの発達	2.84
5	親の役割と保育	2.74

表6. 大学で学んだ程度（下位5指導項目）

順位	指導事項	平均値
13	消費者の権利と責任	2.15
14	消費行動と資源・環境	2.05
15	高齢者の福祉	1.75
16	高齢者の特徴と生活	1.74
17	高齢者の介護の基礎	1.63

(4) 学ぶ必要性

学ぶ必要性に関して「大変必要である」「かなり必要である」「必要である」「必要性は低い」と回答した教諭の割合を図7に示した。次に、学ぶ必要性があると感じる指導事項の上位5事項を表7に示した。学ぶ必要性が

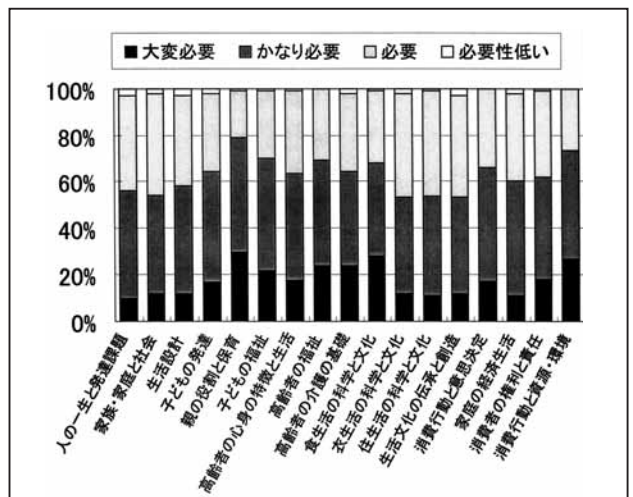


図7. 学ぶ必要性

表7. 学ぶ必要性（上位5指導項目）

順位	指導事項	平均値
1	親の役割と保育	3.08
2	消費行動と資源・環境	3.00
3	食生活の科学と文化	2.95
4	高齢者の福祉	2.93
5	子どもの発達	2.91

高い指導事項は、「保育」「消費・経済」「食」「高齢者」の分野に関する事項であった。「保育」「食」は大学でも

よく学んでおり、得意としている教諭が多い分野で、さらに学びたいと考える教諭が多いようである。一方、「消費・経済」「高齢者」の分野は、大学で学んだ程度と得意の程度が低い分野である。そのため、学ぶ必要性を感じる教諭が多いと推察される。

(5) 相関分析

意識調査で取り上げた5つの指導項目「人の一生と家族・家庭」「子どもの発達と保育・福祉」「高齢者の生活

表8. 人の一生と家族・家庭についての相関係数

	指導の必要性	得意の程度	大学で学んだ程度	学ぶ必要性
指導の必要性	1			
得意の程度	0.22*	1		
大学で学んだ程度	-0.01	0.33*	1	
学ぶ必要性	0.45**	-0.01	-0.04	1

*P<0.05, **P<0.01

表9. 子どもの発達と保育・福祉についての相関係数

	指導の必要性	得意の程度	大学で学んだ程度	学ぶ必要性
指導の必要性	1			
得意の程度	0.20	1		
大学で学んだ程度	-0.06	0.20*	1	
学ぶ必要性	0.51**	0.11	-0.04	1

*P<0.05, **P<0.01

表10. 高齢者の生活と福祉についての相関係数

	指導の必要性	得意の程度	大学で学んだ程度	学ぶ必要性
指導の必要性	1			
得意の程度	0.30**	1		
大学で学んだ程度	-0.07	0.19*	1	
学ぶ必要性	0.51**	0.09	-0.16	1

*P<0.05, **P<0.01

表11. 生活の科学と文化についての相関係数

	指導の必要性	得意の程度	大学で学んだ程度	学ぶ必要性
指導の必要性	1			
得意の程度	0.25*	1		
大学で学んだ程度	0.15	0.47**	1	
学ぶ必要性	0.49**	0.08	0.11	1

*P<0.05, **P<0.01

表12. 消費生活と資源・環境についての相関係数

	指導の必要性	得意の程度	大学で学んだ程度	学ぶ必要性
指導の必要性	1			
得意の程度	0.26*	1		
大学で学んだ程度	0.02	0.25*	1	
学ぶ必要性	0.44**	0.15	-0.05	1

*P<0.05, **P<0.01

と福祉」「生活の科学と文化」「消費生活と資源・環境」について、「指導の必要性」「得意の程度」「大学で学んだ程度」「学ぶ必要性」の項目間での相関関係を分析した。それぞれの結果を表8から12に示す。

結果から、「指導の必要性」と「学ぶ必要性」の項目間に、相関係数が0.44から0.51と、すべての指導項目で、有意な正の相関が見られた。「生徒への指導が必要である」と感じる分野は「教諭自ら学ぶ必要性」を感じていることが示唆される。次に、「生活の科学と文化」において、「得意の程度」と「大学で学んだ程度」の項目間に、相関係数0.47の有意な正の相関がみられた。「生活の科学と文化」は衣食住の分野を含み大学でよく学んだと考えている指導項目である。すなわち、大学でよく学んだことは、得意になる程度が高くなることを示しており、大学教育の重要性が示された良い例と思われる。その他の指導項目においても、相関係数は0.19から0.33と低い、「得意の程度」と「大学で学んだ程度」の項目間に有意な正の相関が見られた。さらに、「指導の必要性」と「得意の程度」の項目間にも、相関係数は0.20から0.30と低い、「得意の程度」と「大学で学んだ程度」の項目間に有意な正の相関が見られた。教諭が得意と感じている分野は、指導も必要と考える傾向があるようである。

Ⅳ. まとめ

高校における家庭科の履修単位数と授業内容についてと高校家庭科教諭の意識についての調査をおこない、以下の結果を得た。

1. 家庭科基礎科目を、旧課程ではすべての高校生が4単位以上で履修していたが、新課程では合計で60%以上の高校生が2単位と3単位で履修しており、履修単位数に、平均で1単位以上の減少がみられた。さらに、割り当て授業時間数は、「食」「衣」「保育」の分野が大幅に削られ、食以外の分野はほぼ同程度になった。
2. 家庭科教諭の意識調査から、指導の必要性が高い分野は「保育」「食」「消費・経済」であった。得意の程度が高い分野は「食」「衣」「保育」で、得意の程度が低い分野は「高齢者」「消費生活」「家庭・経済」であった。大学でよく学んだと考える分野は「衣」「食」「住」「保育」で、学んだ程度が低いと感じている分野

は「高齢者」と「消費・経済」であった。特に、学びたいと思う分野は「保育」「消費」「食」「高齢者」であった。

3. 生徒へ「指導が必要である」と考えている分野に対して、教諭は「自ら学ぶ必要性」を感じていること、「大学でよく学んだ」と考える分野が「教諭の得意分野」になっていることが、相関分析結果から示唆された。

今回の調査結果から、高校において家庭科の授業時間が大きく減少し、今まで時間をかけていた「衣」「食」「保育」の分野で大幅な授業の削減がみられたことは、残念なことであり今後の大きな課題である。家庭科教諭の意識調査から、大学でよく学んだことが現場で生かされていることを示した結果は、長年における大学の成果を示すものである。さらに、現状に対応した教員養成と教諭の意欲に対応した学習環境の整備が大学に求められている。

《参考文献》

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説家庭編，開隆堂（2001）
- 2) 文部省：高等学校学習指導要領解説家庭編，実教出版（1994）
- 3) 佐藤文子，川上雅子：家庭科教育法，高陵社書（2001）
- 4) 仙波千代，高部和子，小笠原ゆり，大竹智恵子：五訂家庭科教育法，社光生館（1998）
- 5) 梶本逸子：石川県の家庭科教育の現状と課題，全国高等学校長協会家庭部会，pp46-53（2003）
- 6) 平成15年度愛媛県教育関係職員録，財団法人愛媛県教育会編，（2003）
- 7) 内田治：すぐわかるexcelによるアンケートの調査・集計・解析[第2版]，東京図書（2002）

(資料) 家庭科教諭の意識調査に用いたアンケート用紙

選択肢の中から当てはまるもの1つに○をつけて下さい。

- (1) 先生ご自身が高校生に教える必要性の程度 (2) 先生ご自身の得意の程度
 (3) 先生ご自身が大学で学んだ程度 (4) 先生ご自身が学ぶことを必要と感じている程度

内 容	指導の必要性			得意の程度			大学で学んだ程度		学ぶ必要性					
	大変必要である	かなり必要である	必要である	大変得意である	得意である	あまり得意でない	詳しく学んだ	ある程度学んだ	あまり学ばなかった	学ばなかった	大変必要である	かなり必要である	必要である	必要性は低い
(例) 家庭の機能と家族計画		○				○			○			○		
(1) 人の一生と家族・家庭	ア 人の一生と発達課題													
	イ 家族・家庭と社会													
	ウ 生活設計													
(2) 子どもの発達と保育・福祉	ア 子どもの発達													
	イ 親の役割と保育													
	ウ 子どもの福祉													
(3) 高齢者の生活と福祉	ア 高齢者の心身の特徴と生活													
	イ 高齢者の福祉													
	ウ 高齢者の介護の基礎													
(4) 生活の科学と文化	ア 食生活の科学と文化													
	イ 衣生活の科学と文化													
	ウ 住生活の科学と文化													
	エ 生活文化の伝承と創造													
(5) 消費生活と資源・環境	ア 消費行動と意思決定													
	イ 家庭の経済生活													
	ウ 消費者の権利と責任													
	エ 消費行動と資源・環境													
(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動														